

# スウェーデンにおける男女平等教育に関する実証的研究(1)

(平成8年12月3日 受理)

人文・社会・語学・体育教室（教育社会学） 松 浦 勲  
名古屋短期大学保育科（青年心理学） 大 村 恵 子

## Research concerning the Education of Gender Equality in Sweden

Isao MATSUURA  
Keiko OMURA

### は じ め に

世界で最も男女平等と社会福祉が進んでいるといわれる北欧諸国、とりわけスウェーデンは、第二次世界大戦後、教育をはじめとして社会のあらゆる面において、階層、性別、地域、年齢等による格差をなくす、すなわち不平等是正にむかって絶えざる制度改革を行ってきたことは周知の事実である。1960年以降に限っての男女平等における政策の推移（表Ⅰ）をみても瞠目に値する。

最近、日本でもスウェーデンに関する文献が多数出版されているが<sup>1)</sup>、それらによると、教育に関しては戦前までは日本やヨーロッパ諸国と同様、選抜的な複線システムであり、中等教育は裕福な階層の子弟の教育、初等教育は労働者階級の教育を担うものであったという。それが、戦後から諸改革を重ね、非選抜的かつ総合的な制度に変えられていき、現在では、リカレント教育等の充実した「教育大国」といわれ、「男女平等先進国」とまでいわれるようになったのである。同じ「教育大国」といわれる日本とその内容には大きな違いがあるのである。スウェーデンでは、長年続いた社会民主主義政策の基本理念は「正義・公正」であり、それが「たてまえ」としてのスローガンに終るのではなく、実際に実現されてきたといえよう。そして、それらを実現する手段に「教育」が考えられ、「教育」が重要視されてきたといえよう。

我々は、ここではその教育政策、とりわけ男女平等教育の成果を検証するために、予備的作業として行ってきた実証的調査研究について述べる。

第1は、現段階の男女平等教育の政策とその実施方法をみるために行った諸機関の専門家たちへのインタビュー調査についてである。

第2には、スウェーデンのこれまでの政策効果を明らかにするために行った大学生へのアンケート調査についてである。その主要な視点は、青年たちのジェンダー（社会的に作られた性差）に対するさまざまな意識と、男女平等政策の結果として生ずる離婚、

表1 スウェーデンの男女平等政策（1960年代以降）

1962年	新教育制度 義務教育7年から9年へ（男女共学） 女学校の廃止 カリキュラム改革（家庭科・工芸の男女別修から必修へ）
69年	教育省 男女平等教育計画書（あらゆる科目で男女平等を扱うこと。教材の性差別を排除一義務教育課程）
70年	中等教育が新カリキュラムを採用（学校 男女機会均等実現の拠点の要請）
71年	保母養成学校に男子を積極的に入れる実験
72年	男女平等問題諮問委員会設置
74年	両親保険法（育児の平等化：両親は出産に際して出産休暇を分割できる）
75年	教育休暇法 男女平等問題諮問委員会の報告 就学前教育法
77年	成人向け基礎教育 未婚、離婚両親に共同養育権
78年	男性にも特別育児休暇
79年	労働における男女平等化推進法
80年	男女平等オンブズマン制発足 教育計画書改訂：自治体の教育委員会と学校長に男女平等教育実現の努力義務を課す（学校は、男女平等を家庭に、職場に、社会全般に実現させるよう努めなければならない。学校は性別役割問題を生徒達が討論し、今までの性別役割を問直すよう授業を準備しなければならない）
82年	教科書計画：一層の男女平等の教育内容を押し進める。 コミュニンの成人教育実施（受講生の多くは女性）
84年	ストックホルム教育大学、性別役割分担批判、男女平等教育を教員養成課程履修の必修科目とする要請書を教育省に提出、1985年秋実施
87年	同棲法制定
88年	男女平等のための5ヵ年計画（男女の職業上の偏りを是正するためのスタディプログラム） 議会で教育における男女平等促進の努力目標を設定（男女構成がどちらも40%以下にならないようにする。校長職における女性の割合を増加させる。）
89年	男女平等を促進する課程を教員養成大学に設置するように勧告（15の大学で施行、助成金を出す。）
91年	高等教育での男女平等化の報告がだされる（工学を除く分野でステレオタイプ化が進行） 保夫母・レク指導員の男女平等化を促進している9の大学に助成 地方自治体における成人教育を改正する法律制度を議決
92年	ワーキング・グループを任命（学校の発展化・追跡調査・評価・監督） 高等学校における男女平等教育の促進を条例で義務つける新男女機会均等法制定
93年	10項目からなる平等化の計画書を提出（現在進行中） 理系人材増員のニーズに応えるため、97年までの5ヵ年でsekに1700万を配当
94年	新履修課程を設定（男女平等化の内容を含む） 保護者に通わせたい学校を選ぶ権利をあたえる。民間の科学センター（SEKに600万の補助）

資料出所 松崎 論文（注2）と同じ

岡沢 憲美『女たちのスウェーデン』より

再婚によるワンペアレント・ファミリー（とりわけ子どもの社会化）に関する意識である。  
（松浦勲）

## 1章 男女平等教育の政策・実践についてのインタビュー調査

われわれは、すでに述べたようにスウェーデンにおける男女平等教育の諸改革の現段階の成果、そして1994年からの新しい学習指導要領にみられる今後の政策のゆくえを知

るために以下の各種、機関のインタビュー調査を行った。それは、政策決定の学校庁、具体的な教育を实践する小・中学校、高校、大学、そして男女平等教育研究を行っている研究所であり、更に、男女平等教育を行う基礎的な部分であり、就学前教育の場である保育園四ヶ園を集中的に調査した。

## 1 節 男女平等教育の政策および学校における実践聞きとり調査

### (1) 学校庁・学校等の調査報告

#### ① Ms Kerstin Weyley, Director of Education, Development Department, National Agency for Education

彼女は、1994年より文部省から組織変更した学校庁のディレクターであり、94年度からの新しい学習指導要領及び新カリキュラムに関して広報を担当している。ここでは新しい学習指導要領の特徴（EU加盟を念頭におき新しい国際的視点にたったもの）とそれを全国的に普及させるために、学校庁と自治体、学校現場、父母たちとの関係について話してくれた。

#### ② Rinkeby の小・中学校とプレスクール

リンケビーは、ストックホルムの中でも最も移民の多い地域で、Ms Gunli TELFor（この地域の社会局のマネージャー）によれば、110の異った言語を話す人々が居住しているという。

この小・中学校においても児童、生徒の母国語は40ヶ国語に及び、逆にスウェーデン語を母国語とする児童、生徒は1人もいない。学童保育、障害児の学級も併設されている。

ここでは、多様な民族の言語・文化を尊重しながら、子どもたちをスウェーデン社会に適応させるための細かい配慮がなされており、今日のスウェーデン教育の課題の一つとされる移民の平等問題の実態を観察できた。ここでは、われわれの課題としてきた男女平等教育以前に異文化の尊重、民族の平等が主たる課題であった。

#### ③ Kurgholmens Gymnasium

Mr Olov ERICSON 校長と美術、社会の二人の男性教師から、この高校の特色、及びスウェーデンの高校教育について語ってもらう。この高校は音楽コースとインターナショナルコース（英語で授業を行う）があり、スウェーデンの高校として最もレベルが高く、一般化できない特殊な高校であった。校長は「新しいカリキュラムで提起していることを、ここでは先取りしており、それは①英語の強調②生徒の主体性重視であり、我々の今までの努力を正当化してくれた」と評価していた。

この高校は試験（大体3倍ぐらいになる）を受けて入学し、9～12クラス（360人の定員）で、スウェーデンの各地から入学し、学業成績、社会性の面でも困難な問題をかかえている生徒は少ない。入学後、学業についていけない生徒は転校させ、その生徒に適した環境におくが、20才になるまではこの学校は責任をもっており、転校後もケアをすると校長は力説していた。

教員の構成は60～65%が女性教師である。以前は男性教師のみであったが、教師のス

ティタスが下がってきて、女性教師が多くなっただけらしい。教師の給与は男性の給料としては中の下であり、労働者よりは高いが、ホワイトカラーよりは低い。

ここでの男女平等教育は「トレランス」の授業で、エスニック問題と同時に行われており、ボスニアとセルビアの生徒が同じクラスで学んでいるごとく、67ヶ国の生徒がいるという。

新しいカリキュラムは、それぞれの学校の特色を出すように提起しており、校長の裁量の自由を大中に認めており、今後、スウェーデンの学校間の「競争」が激しくなると、校長は語っていた。

④ Dr Lars-Erik Bjessmo, Stockholm Institute of Education, Department of Humanistic and Social Sciences

ストックホルム教育大学の人文学部の Bjessmo 博士は教員養成と社会科の教科書作製にかかわっており、新指導要領、新カリキュラムについての意見を語ってくれた。

博士は、スウェーデンにおいては、戦後から今日まで4回の学習指導要領の改訂があり、その主な特徴は、1962年版は「学校教育の内容についてのカリキュラム」であり、1969年版は、J. Dewey 理論の影響を受けた「児童中心主義」であり、1980年版は「学校はしつけをする義務」を明確にしており、今回の1994年版は「学校は教育する場であり、知識を与えるところである」ことを明確にしたと語る。従来の学習指導要領は、教育の目的、内容について規定してあるだけで、教え方については自由であった。今回は教師は教育計画をたてる時に、他の教師と協力して計画をたてることが規定され、教師の専門性が強調されている。従って、教師を養成する教師教育においても変化がみられると述べた。

⑤ Dr Karin Sandqvist, Stockholm Institute Center for Child and Youth Research

男女平等教育の理論研究を行っているのはカリン博士である。彼女は父親の育児参加と子どもの発達との間の関わり、母親の就労（仕事内容、労働時間、就労態度等）が子どもに与える影響、単親家族と子どもの発達の関係などの調査研究を通して、子どもたちの中にジェンダーの社会化のプロセスの解明を行っている。今までに明らかになったことは、父親の育児参加の多い子の発達は調和がとれていること、母親の就労は、母親自身が仕事を楽しんでやっているか否かが、子どもの発達にプラスあるいはマイナスの影響を与えること、更に、gender identity に関しては、地域的、時代的制約はあるが、選択科目の男女差においては、父親の家事参加にもかかわらず厳然として存在しており、これが今後の研究課題であると語る。

(2) 聞きとり調査からみられる男女平等教育の現状の問題点

すでに1980年代のはじめに「スウェーデンの男女平等と教育」について論じた松崎巖は「教育における平等化は進んでいても、教育を通しての平等化はなお不十分ではないか」<sup>2)</sup>と指摘しているが、1995年現在においては、それが止揚されたのであろうか。ここでは、先述したインタビュー調査と収集した諸資料から、「教育における平等」と「教育を通じての平等」という視点から再検討する。

「教育における平等」とは、学校や教育環境を平等にしていくことであり、男子校、

女子校の廃止、男女共通のカリキュラム、教師の性別構成の均等化などである。

他方、「教育を通じての平等化」とは、進路選択、職業選択において、ジェンダー視点によるステレオタイプによらない決定ができる環境づくり、職業、社会的役割における男女の偏りを学校教育段階からは正していく取りくみなどを指す<sup>3)</sup>。

#### ① 教育における男女平等

新しい学習指導要領<sup>4)</sup>には、学校における「基本的価値」の項で、「人命の不可侵、個人の自由とインテグリティ、万人同等価値、男女の平等、弱い立場にある人々、危険にさらされている人々への連帯が学校で生徒に伝えるべき価値観である」とのべ、更に「同等の価値」の項では、「学校は、男女の同権と男女の同じ可能性の享受を積極的に促進する。女子と男子が学校でどのような扱いを受け評価されるか、どのような要求と期待をかけられるかで、生徒の間に女らしさ、男らしさの受けとめ方が決まってしまう。学校は伝統的な男女の役割に関する固定観念を揺るがす責任を負う。それゆえ、学校は、生徒が個々の能力と興味を性別に関係なく試し、伸ばしてゆくゆとりを与えねばならない」と記している。

このように、学校が男女平等の価値を教える役割をもっていることの重要性を具体的に明記している。スウェーデンにおいては、戦後4回の学習指導要領の改訂があったことはすでにみてきたが、それぞれの項を比較すると今回の内容が、より具体的になっているのがわかるのである。

1969年版では、「学校の活動に関する一般的指示」の項で、「教育課程の目標及び指針によれば、学校は家庭、労働市場、社会一般において男女両性間の平等化を推進しなければならない。これは一つには男子と女子を平等に扱うことによって、一つにはその活動において性の役割についての伝統的態度に反対し、社会の多くの領域に存在する影響力、職務、賃金に関する男女の差の問題について討論し、疑問を設定するよう生徒へ刺激を与えることによって達成しなければならない。……学校は男性と女性の将来において同一の役割を果すこと、親としての役割への準備は男子にも女子にも同様に重要であること、女子は男子と同じように職業に関心をもつのが当然であることを前提にしなければならない<sup>5)</sup>とし、社会に残存する女性差別の偏見と闘い、男女の平等化を実質的に推進する積極的な役割を学校に課している。

1982年秋から実施された指導要領<sup>6)</sup>においては「……学校は生徒が民主主義の原則である寛容、協力、人間同士の平等と同権の理念を支え協調する心を育むように仕向けなければならない。真実と正義、人間は生まれながらの価値、生命の不可侵性、個人の尊厳を守る権利の尊重の念を呼び起こすのが学校の主たる使命である。これは何者も弾圧を受けたり、困難な問題を抱えたまま見捨てられることがあってはいけなことを生徒に悟らせるようしつけられなければならないことを意味する。……民主主義社会における共同生活は自由で独自性を有する人間により形成されねばならない。学校はそれゆえ男女平等のために働きかけねばならない」と学校の役割を強調し、これが先にみた1994年版に、より具体的に踏襲されている。

以上のように基礎学校教育課程において、学校における男女平等をかくも具体的に明記していることに、日本におけるそれと比較した場合に、大きな違いを指摘できよう。

このような教育政策は、スウェーデンにおける青年の大多数が義務教育修了後、高校に進学すること、すなわち、「スクーリングの長さ」という点では男女差はなくなっている。しかし、彼らの選択教科においては、1993年段階においてもなお差異がみられる（表2）。女子は文系を選択し男子は理工系を選択する。表2にみられるように科学を選択する男子は21%、女子はわずか3%にすぎない。

これらの実態は、すでに就学前に男女の伝統的役割を身につけてきていることから生じていると説明されている。とりわけ、単親家族（母と子）の増加は、他の性の学習を欠落させるので、保育園における保父の増加という政策によって補う配慮がなされている。

学校教育においても、学校の環境、すなわち学校のスタッフ（経営者、及び理系教師は男性、文系教師は女性、事務・給食職員は女性）や、低学年の担任ほど女性が多い。また教師自身のジェンダー視点の内在化により、男子女子に対する接し方（男子生徒に積極的に発言を求めたり、リーダーシップを取ることを求めたりする）の差異、あるいは物理などのテストを男性教師が作成するために男子に有利に作用するなど、いわゆる学校教育における潜在的カリキュラムを指摘されており、教師教育の新たな試みが提起されている。

ストックホルム教育大学では、表1でみられるように、1984年に文部省に「性別役割分担批判を含めた男女平等教育を教員教育必須科目とする」という教育課程内容の変更を要請している。「子ども・文化・言語」という必須コースでは「性・ジェンダー」を様々な角度から考察する授業が行われている。男女平等、ジェンダーに関して積極的に関心をもつ教師の養成、教材や教え方にも意識的にかかわる教師の養成が行われている。

## ② 教育を通じての男女平等

図1はスウェーデン社会における男女別の職種の分布をみたものであるが、収入の高い理系職種（システムエンジニア・プログラマー、企業管理、

表2 教科におけるジェンダー

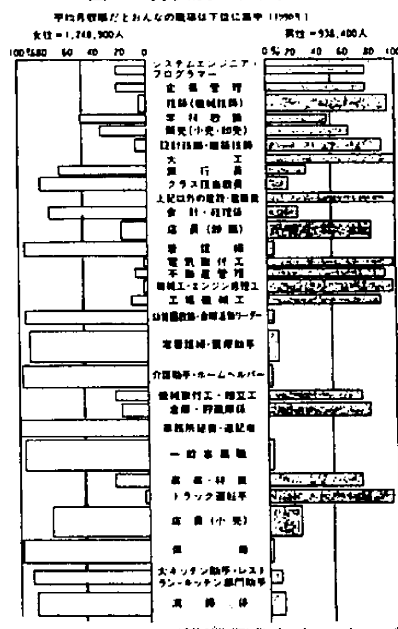
	1985	1990	1993
国語/外国語			
男子	57	55	60
女子	78	73	76
美術			
男子	10	12	15
女子	11	15	20
科学			
男子	27	23	21
女子	3	2	3
社会			
男子	4	2	2
女子	6	3	2
その他			
男子	3	9	13
女子	2	7	10
合計			
男子	100	100	111
女子	100	100	111

※1985年と1990年は、一教科選択

1993年では、一教科以上選択。

『Education in Sweden』1994 P12

図1 男女別の職種分布



出典 岡沢憲実

『おんたちのスウェーデン』NHK ブックス

機械技師)は男性が占有し、月収の低い職種(一般事務、小売店、保母、介護士)は女性が占めている。これは、基礎学校の高学年、総合制高等学校における男女の選択の偏りと軸を同じくしている。学校教育における平等が、社会の諸分野での平等の達成には至っていない状況といえよう。学校において選択するのが、個人の選択であっても、男女によって学ぶ内容に偏りがあれば学校と職業に緊密な関係があるだけに、それが上記のスウェーデン社会における男女の社会的地位の差に連動することになる。

それぞれの学校で男女の偏りをなくすためにさまざまなとりくみが行われている。例えば、高校において夏に「女性職」でない職業についている女性から話を聞いたり、女子のための自然科学の講座がひらかれたりしている<sup>7)</sup>。

大学においても、高校の職業科教師養成において自動車整備士、金属加工分野での女性教師の養成に政府が補助金を出している。

成人教育(スウェーデンでは自治体が成人のための教育課程を設置しなければならない)では就職のための知識・技能の講座がひらかれ(この参加者は女性が圧倒的に多い)、今の職種から更に高度な職種に就くような学習機会が豊富に与えられている。

(松浦勲)

## 2 節 保育園聞きとり調査報告

1975年の新聞記事<sup>8)</sup>で、筆者はスウェーデンにおいては赤ちゃんの世話をするのは母親と限定せずに、誰かが赤ちゃんの世話をしますと絵本の中で表したり、保育園ではオモチャも男の子、女の子と区別せずに渡すようにしているなどということを知って以来、この国の性役割のあり方に関心を持ち続けてきた。

そして今回、スウェーデンを訪れた際、4つの特徴的な保育園でインタビュー調査を試みた。中心は男女の性役割の固定化を防ぐためのとりくみについてであったが、まずそれぞれの園の特徴について記し、さらに、単親家族についても特徴的な回答のみ記す。

### (1) 聞きとり調査の結果

#### ① GRÖNDALS FÖRSKOLA (SOLLENTUNA 市)

Preschool for deaf and partially deaf children

聞きとり対象: Jan SIMON 園長 (男性園長)

##### A. 園の特徴

○郊外の自然の中の園。施設のにもゆとりをもった、明るい構造の園。小学校と併設。

○設立主体—— コミュニ立(市立)の園。

最近スウェーデンでは私企業化が進み(現在30%)、ヤンさんも市から企業として経営しないかと言われたが断ったと言う。この園は91年までは普通の保育園だったが、92年から聾の子のための園として再出発した。

○入所児童数—— 現在15人。

3年前から難聴の子も入所できるようになり、さらに現在は発達遅滞の子もいる。子どもたちは14の自治体から来ており、タクシーで来る(県が支払う)子もいる。

ここでは5才児が最年長。2才から入所。

○職員数 — 11人。

保育者は、2人が健常者、4人は「聞える」程度、2人は障害者、2人は全聾、他に1人。

○聾教育の大まかな歴史について

70年代までは統合保育をしていたが、今では言語障害の子どもたちには特別の園が作られるようになった。言語療法士もいる。以前はスウェーデンも口話（こうわ）を奨励していたが、82年以来手話が公的な言語として認められてきた。子どもの送迎をするタクシーの運転手にも手話の講座を開いて教える。

○保育内容・方法について

この園では、コンピューターを使い、変な音声を出していればディスプレイに映し出して、音の調整をすることを教えている。

## B. 性役割に関して

○昔は男の子として、女の子として育てられた。今は男のくせに、女のくせにとは言われず、non-Sexualな教育をしている。男女ともbakingをさせたり、女の子にカナヅチを渡したりして働きかけている。スウェーデンの保育園には女性の保母が多いので、荒っぽいことには寛容でない。

○隣の保育園で、究極の男らしさ、女らしさについてのデンマークとの比較の研究プロジェクトが組まれている。それは、男の子はどうしても荒っぽくなるが、その原因を追求するもので、暴力的なテレビ番組の影響ではないかと考えて今研究されている。

○ソレンチューナ市では、保育園、幼稚園、学童保育の保育者のうち、保父が49人で、そのうち男の園長は3人。保母は400～500人いる。

## ② NORA HERRGÅRDS FÖRSKOLA (DANDERYD 市)

聞きとり対象：Lillemor HOLMSRTÖM 園長

### A. 園の特徴

○郊外の自然の多い住宅地の中の園。園舎は昔貴族の館だった建物。比較的階層の高い家庭が多い。

○設立主体 — コミュン（市）

スウェーデンでは、2年前から保育園が企業のような形になり、職員の採用も入所児童の決定も園でできるようになった。

園の収入の½は親からの徴収、½はコミュニティからの税金。

園長は園の経営、運営の全体が把握できて面白くなったが、事務量増大は負担。

○入所児童数 — 80人（65～80人位が普通）

内訳	<div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <p>6才児 — 17人（就学前教育を受ける）</p> <p>2～5才児 — 18人</p> <p>2～5才児 — 18人</p> <p>1～4才児 — 13人</p> <p>1～3才児 — 13人</p> </div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; margin-left: 10px;"> <p>この中から5才児のみ、9：～13：まで両方のクラスから集めて保育する。</p> </div>
----	---



## ○職員数——20人

保育者16人＋4人（掃除、給食、園長含む）

## ○保育時間

8：～16：が平均的

6：30～18：（開所時間）

## ○労働時間

40 H / W 39 H が普通 1 H は会議（公務員は全て同じ）

B. 性役割に関して

○70年代は女性運動が盛んで、男の子の遊びを女の子に奨励したりした。しかしそれは極端であったため、男の子に人形を与えても、それで車のように床を走らせようとした。女の子に車を与えても、ベッドに車を寝かせたりした。

男の子は女の子と違うのだから、オモチャを“与える”のではなく、今では“子どもが好むもの”を取るようになっている。

70年代は子どもは白紙で生まれてきて、男の子、女の子になると考えられていた。今はいろんな知識が入ってきて、そういうものではないと考えられている。

保育園は保母が多いため、「男の子は乱暴だ、おとなしく」というふうにすることが多いので、女の型にはめないようにと、自分たちのあり方に注意している。

○園で子どもが病気になった時、園長はまず父親の職場に TEL するように意識的に保母に言っている。周りはまだ（母親が休むのが当然という）古い意識なので。

自分が休んで子どもを見るというお母さんに、この園長は「あなたは職場で重要な仕事をしている人ではないの？」と問いかけるようにしている。

○男の子は男の人がやるのを見ることを好むから、男の子には男性の存在が必要。保育園では70年代から保父さんをふやそうとしてきた。今この園でも子どもの世話をする男の人（6才児担当）がいる。

C. 単親家族について

○この園には単親家族の子は1人か2人。多分離婚はしているが、又再婚している。1 W づつ、父の所、母の所へ行くケースもある。

○単親家族で育てている子どもに特別な性格特徴があるかという問いには、違いはないという答えであった。こちらでは、移民の家庭、年取ってできた子など、家庭にはいろんなバリエーションがあるので、それに慣れている。

○この園では、保育園は家庭を支える機能をもつという考えで、親が離婚しようとしている時に仲違いがおこると、中に入って仲介したりする。離婚しようとしている時は、親の方からうちあけてくれる。子どもが不安定になっている時は、それを親に伝える。子どもも6年間預かるのが普通なので、保育者とのアタッチメントも形成されている。日本では、子どものことを考えたら、離婚すべきではないと言われるが、という問いに対して、スウェーデンでは日本ほど母親が再婚する時子どものことを心配しないのではないか、子どもが母親を信頼していれば、それほどお母さんの好きな人なら、と

子どもが受け入れてくれるように、母親も子どもに対して努力するとの回答であった。しかし、園長はやはり離婚、再婚は大きな問題だと答えた。

### ③ BERGSHAMRA FÖRKSKOLA (SOLNA 市)

聞きとり対象：Katarina ARVIDSSON 園長

#### A. 園の特徴

○住宅地の中の園。建物や環境等は保育園として一般的。

○設立主体——コミュニン

コミュニンからお金をもらい、全部の責任をもって企業のように経営している。親からの徴収部分はソルナ市では少ない。

15ヶ国の外国人の子どもが入っている（50%以上）。外国人の子どもには、通訳を兼ねて週2回パート保育に来てもらうので、経費がかかるが、園長としては仕方ないと主張している。

○入所児童数——37人

┌ 5～6才——26人  
└ 1～4才——11人

○職員数——フルタイムは7人（給食担当も含む）

○保育の特徴

この園ではコンピューターを子どもに教えている。このコミュニンには55の保育園があり、その中で4ヶ園がコンピューターを導入しているが、この園が一番早い。親もそれを喜んで入所させる。

スウェーデンの子どもたちも家ではゲームをする子が増えている。そういうバカなことをしないために、ここではキッチンと5、6才からコンピュータを教えている。

#### B. 性役割に関して

○食卓を整えるとかコンピューターを扱うなどは男女とも同じようにやっているが、しかし男の子はどうしても男の子である。したがって、男女を分けて行う活動もある。女の子は優美なものへの傾向があるのでリトミックをやるが、男の子はその時間は森へ連れて行く。それが好きでなければ、好きな方へ参加できる。男の子はエネルギーがある。生まれつきのニーズを充すようにしている。

○子どもが病気になった時などの両親への電話のかけ方については、この園長は子どもは親の子だから、どちらにTELしたらいいか親に聞く。誰が迎えに来るか、親の責任だから園は関知しないと答えた。

#### C. 単親家族について

○ソルナ市は400万クローネ予算が削減されたが、まだ豊かな市なので、単親家族が多い。

その家庭の子どもに対する特別の配慮としては、保父を雇うようにしているが、なかなかみつからない。この園では週に何日か来てくれる外国人の男の人がいる。

○離婚（しそうな）家庭には、子どものためにどちらの親にも介入しない中立の態度を

とる。子どもは1Wずつ、父の所、母の所に行くので、関わりとどちらかに傾くことになる。私たちは子どもを中心に心理学などを勉強してきたのに、急に大人の心理学に関わるようなことはできない。

ただ母親が母親役ができない時は、子どもにとっていけないと介入する義務がある。

#### ④ GAMBRINUSGATANS FÖRSKOLA (STOCKHOLM 市)

聞きとり対象：Ms Birgitta NILSSON (園長ではない)

##### A. 園の特徴

○この園はストックホルム市の町中の園。狭くて機能的な構造。

○設立主体—— コミュニオン

園長はこの幼稚園と乳児園の2つの園と、市の会議室の中の保育園と、3つの園の園長を兼ねている。

○入所児童数と保育者数

〔3～5才——19人 (外国人はユーゴとアメリカの子)

〔保育者——2.75人

パーソナル、アシスタント1人 (戦争のため集中力をなくしたユーゴの子のため)

入口が別の乳児園の方の定員

〔1才半～3才——13人

〔保育者——2.75人

他に給食1人

掃除1人 (男性)

○開所時間

月～金曜まで7:～17:30まで

○保育方針

ある教育学者に学び、言葉と動作 (リトミック、ドラマ) と感覚を養うことを方針としている。

この園の隣が公園であり、そこの変化を観察に行く。

保育は毎日午前と午後と大まかに活動が分けてある (毎週計画を立てる)

木曜は毎週お弁当持ちでバスか地下鉄で森へ遠足に行く (町の中に住んでいるので特に配慮)

金曜は自由な日。午前はbaking, 図書館へ行く, スライドを見る, 交通安全のための散歩など。午後は水泳, 指人形を見に行くなど。

##### B. 性役割に関して

○男の子は男の子として、ありのままに、平等に保育している。

しかし、親からは園では女性的な活動が多すぎると批判が出ている。

学校に行くようになると、男の子が優勢になっていくので、保育の段階では女の子を支えていいんではないかと思っている。

○自分が保母養成の教育を受けた時、gender rollについて考えることを学んだ。しかし、

70年代は非常に極端だった。規則への反発の強い時代だった。あとで研修を受けた現在でははじめがハッキリしてきた。

○子どもが園で病気になった時、私たちは一番つかまりやすい親に TEL する。

○男らしさとは、私が考えるのは「家族の世話をする」「家族に思いやりを示す」「何事にも熱意をもってやる」ことだと思う。それは男性だけではなく、一般的にもそうだと思う。以前は、男の人が働いて家族を養っていくのが男らしいと考えられていたのではないかと、という問いに、今でもそれはあるのではないかと回答であった。十分な収入がなく、家族を十分養っていけないような男の人は自信がなくなり、自分の identity がなくなってしまうのが常だと思う。

### C. 単親家族について

母親のみの家庭の場合、男性と同じように働いて家族を養っていかなければならないが、女性らしさはそれによって毀損されはしない。しかし失業した母子家庭では、問題は重大である。

単親家庭の子どもに問題性はないかという問いに、母親が参っているかどうかなど、ケースによるという回答であった。

子どもにパーソナリティの問題があれば、集まりの時にだっこしてあげるなど、他の子より多くのニーズを持っていると考えて対処している。パーソナル・アシスタントをつけることもある。

### (2) 保育園調査についての考察

① 元々筆者が興味を持っていた性役割の固定化を打破する70年代の取り組みについては、2つの園においてそれが極端すぎたという述懐で一致した。ある園長は、あとで研修を受けたと述べているが、その研修も多分一斉に行われたのではないと思われる。初めにどのような取り組みがなされ、それをどのように総括し、またその後その極端さを是正するためにどのような研修が行われたのか、資料がほしいところである。大事だと認めれば一斉にそれに取り組むこの国において、この取り組みは一種の社会的実験であるので、その経過については大変興味深い。

② 男女の性役割の捉え方については、男の子は（本来）男の子だからとか、男の子はエネルギーがあるからというように、生得的な性差を前提とする考え方が保育者の中に共通に見られた。そういう捉え方の部分と、男の子にとっての暴力的な TV 番組の影響や保母の女性的な型にはめこむ保育のしかた、というような後天的、社会的影響との関係がどう捉えられているのかは判然としなかった。

筆者も性差に生理的、生得的な部分が存在することを全く否定するものではないが、しかし性格や人格の基礎的な部分を形成する時期に大きな影響を与える保育者たちが、かなり一致して生得的な性差を口にすることについては、そのこと自体が後天的な性差を形成しているのではないかと感じられた。

③ しかし、保育園のみならず学校教育における従来の性役割を打破するための試みは担当幅広くかつき細かに行われており、評価に値する。今回紹介に至らなかったが、

ストックホルム市でも移民の多いリンケビー地区の保育園において、アフリカの回数徒であるソマリアの男の子たちは女子をバカにし、手をつなぎたがらないが、保育者たちは遊びの中でつい手を触れることをしむけるなどの努力をしている。同様に学校教育では、試験の出題すらも男性教師が行うと男子生徒が点を取りやすい出題になるという反省がされたり、数学は女子の方が苦手なので、自由に質問や意見が出しやすいように、女子だけのクラスを作るなど、その適否はともかく、genderの観点での配慮はきめ細かい。そういう点で、他国のこれからの取り組みに大いに参考になると思われる。

#### ④ 3つの園の特徴について

障害児保育を専門にしている園を除く3つの園はそれぞれ特色を持っており興味深い。

自然に恵まれた、貴族の館を園舎としている園は、家庭や親の支援を保育園の役割として鮮明にうち出しており、とくに母親を伝統的な女性の意識から抜け出させようと揺さぶっている。

一方、コンピューター導入を特色としている園は親への対処のしかたについても事務的な印象を受け、全体に機能的、「現代」的な特色の園であった。

ストックホルム市内の園はまさしく都会の園であり、自然との触れあいを意識的に求めようとする一般的な園の印象であった。

私企業化しはじめたこの国の保育園が、それぞれ自園の特色をうち出し、親にアピールしようとする一端が窺えたように思う。

⑤ 離婚しそうな親への援助のしかた、および子どもが園で病気になった時の親への電話のかけ方についても、三者三様であり、興味深かった。この辺りのことは園独自の判断で対処する事柄であるらしいことが窺われ、この国における個人の考えのバラエティが分かったと同時に、いずれにしろハッキリした個人の考えを打ち出しているところもスウェーデンらしいと思われた。

⑥ 離婚した家庭の子どもが1Wづつ父の所、母の所へ行くというのは、1977年の法律で、別れた（あるいは未婚の）親たちが共同養育権を得たせいであろうか。この方法は「平等」ではあるだろうが、1Wおきに住居と同居者が変わる子どもにとっては、負担が大きいのではないかとと思われる。離婚、再婚の多いこの国にあって、どうしても発言力の弱くなりがちな子どもの負う傷手への配慮はどこまでされているのか、今回は十分ではなかったが、私たちの研究課題の一部である。（大村恵子）

## 2章 スウェーデンにおける青年のジェンダーとライフスタイル

### — 理工系男女大学生の意識調査から —

スウェーデン社会では、男女平等政策が社会建設の基本的課題とされ、それを実現する手段として教育の役割を重視し、さまざまな改革が、実験的ともいえる試みとしておこなわれてきた。それは、二つの側面、一つは「教育における男女平等」と、いま一つは「教育を通じての男女平等」である。この男女平等社会を目指しての両輪は、他の先進諸国の追随を許さないまでの成果をあげているといわれるが、その実態はいかなるものであるかを探るのがわれわれの目的であった。

われわれの目的を明らかにするために、この70年代から、保育園、小、中学校、高校で生活し学習してきた青年に、1章でみた男女平等教育がいかなる形で反映されているかを探ることにした。

まず、スウェーデン在住で我々の共同研究者の、三根子・Von・Euler（ストックホルム教育大学講師）と大村、松浦が、スウェーデンの事情を考慮し、調査表を作成した（後掲）。

対象者はストックホルムを中心とした王立工科大学工学部学生、カロリンスカ大学医学部学生、地方のリンショーピン大学学生である。対象者選定は三根子・Von・Euler等を通じて、調査に応じてくれる学生としたために、かなり理系に偏ったものになっている。

調査内容は後掲の調査表をみればあきらかなように、スウェーデンの男女平等についてどのような認識をもち、それが彼らのライフスタイルの形成に反映しているか否かをみるものである。

調査方法は、留置法によるアンケート調査である。

調査期間は、我々がスウェーデンでの各種インタビュー調査を行っている間（1995年9月18日～23日）に、三根子・Von・Euler等を通じて配布してもらい、我々の帰国後に集票したものを日本に返送してもらった。

#### (1) 調査対象者のプロフィール

調査対象者は、カロリンスカ大学医学部学生19名（男子学生6名、女子学生13名）、王立工科大学工学部学生61名（男子学生35名、女子学生26名）、リンショーピン大学生16名（男子学生11名、女子学生5名）の計96名である（表3）。各大学の学生の専攻は男子はほとんど理工系であり、女子も理工系が多いが、リンショーピン大学の学生2名ほどは文系である（表3）。

スウェーデンの大学はいわゆる高校卒業後その約3分の1が大学に進学し、その他は就職し、その中での労働体験をポイントとして再び大学に入る生涯学習のコースが多い。従って学生の年齢幅は大きい。

我々は次の2つの理由から、年齢を25才以下に限定した。それはジェンダーに関する

表3 調査対象者の属性 — 調査大学の学生数と専攻

	専 攻	男	女	
カロリンスカ大学	医 学 部	6	9	19
	薬 学 部		3	
	N . A		1	
王 立 工 科 大 学	工 業 経 済	9	11	61
	物 理	14	13	
	機 械	2		
	コンピューター	10	2	
	エレクトロニクス エネルギー			
リンショーピン大学	経 済	2		16
	コンピューター	4		
	地 理 学	3		
	技 術		3	
	教 育		1	
	看護		1	
	N . A	2		
		52(54.3%)	44(45.7%)	

意識に、学校教育での平等教育がいかなる影響を与えたかを鮮明にするためと、いま一つの理由は、日本の大学生の既存の調査と比較を可能にするためである。

その結果表4-①でみられるように、全体では20才、21才で50%をうわまわり、その他は分散している。男女別では、若干女子学生の年齢が低い。性別では男子が約10%弱多い。

学生達のシビルステータスは表4-②でみられるように80%がシングルである。ここでスウェーデンの婚姻制度をみてお

くと、結婚は法的届出をしたものであり、サンボは事実婚である。サンボで出生した子と結婚で生れた子との間の制度的差別（日本のように）はない。現在約6割がサンボであるといわれている<sup>9)</sup>。従って、結婚とサンボは限りなく近いが、サンボと同棲はかなりの隔りがある。同棲がサンボ、結婚に至る場合もあるが、解消する場合が多い。

この調査では結婚とサンボが約10%強である。結婚、サンボの学生が年齢が高いとは必ずしもいえない（結婚・サンボ-19才1人、20才3人、22才3人）。しかし、性別では女性のサンボ率が16%弱と高くなっているが、これも、19才1名、20才2名、22才3名、24才1名と年齢が高い学生にサンボ率が高いとはいえない。

次に、シビルステータスと緊密に関係するが、居住をみたのは表4-③である。46%が親と同居し、40%が一人ずまいである。今まで、日本で出版されている文献によれば、スウェーデンでは、18才をすぎれば、親元から独立し、とりわけ学生の場合には、授業料は無料であるし、その他に生活可能な奨学金が得られると説明されていた<sup>10)</sup>。しかし、この調査対象者の示す数字はそれをうらづけない。ストックホルム中心に住宅事情が悪化しているといわれているが<sup>11)</sup>、そのためであろうか。たしかに地方のリンショーピン大学の学生はすべて親元を離れ、一人ずまいかサンボである。（松浦勲）

表4 調査対象者の属性——年令、シビルステータス、居住

		男	女	
① 年 齢	18～19才	5	9	14(14.5%)
	20才	12	15	27(28.1%)
	21才	13	10	23(23.9%)
	22才	8	5	13(13.5%)
	23才	8	0	8(8.2%)
	24～25才	6	5	11(14.5%)
② シ ビ ル ・ タ ス	シングル	44(84.7)	33(75.0)	77(80.2%)
	結 婚	1(1.9)	0	1(1.1%)
	サ ン ボ	2(3.8)	7(15.9)	9(9.4%)
	同 棲	4(7.0)	4(9.1)	8(8.2%)
	N . A	1(1.8)	0	1(1.1%)
③ 居 住	親と同居	20(38.5)	24(54.5)	44(45.9%)
	一人ずまい	26(50.0)	12(27.3)	38(39.6%)
	そ の 他	4(7.7)	7(15.9)	11(14.5%)
	N . A	2(3.8)	1(2.3)	3( )

## (2) 自己形成とジェンダー

### A. 大学生の性役割に関する自己評価について

ここでは、大学生たちに性役割に関して5段階で自己評定してもらった結果について、男女別、国別に比較検討する。

有意差をもってスウェーデンの男女に違いがあったのは、手芸好きの項目であった。しかし、スウェーデンの女性で最も高い平均値を示したのは、「独立心」と「意欲的」の項目であり、それぞれ男性より0.5ポイントも高い。調査対象者がレベルの高い大学に属

表5 性役割の自己評定(国別・性別)

	スウェーデン					日 本				
	男 子		女 子		t 値	男 子		女 子		t 値
	M	SD	M	SD	df=94	M	SD	M	SD	df=945
1. 子ども好き	3.788	.871	3.909	1.074	0.54	3.39	1.13	3.35	1.08	0.55
2. 議論好き	4.192	.864	4.114	.772	0.63					
3. 手芸好き	1.865	.929	2.864	1.322	3.77**					
4. 独立心	3.923	.763	4.432	.625	0.00	3.36	1.15	3.18	1.17	2.41*
5. 感情的	3.5	.960	4.045	.806	0.00	3.50	1.05	3.50	1.11	-0.04
6. 声大きい	3.327	2.955	3.159	.834	0.71	3.17	1.09	3.29	1.22	-1.50
7. 意欲的	3.673	1.004	4.159	.645	0.00	3.15	0.95	3.17	0.89	-0.25
8. 活動的	3.577	.977	3.932	.759	0.05	3.01	1.00	3.10	0.96	-1.44
9. 空想的	3.385	1.157	3.636	.990	0.26	3.49	1.11	3.57	1.08	-1.12
10. メカ好き	3.019	1.321	2.773	1.054	0.32					
11. 家庭的	2.54	.973	2.909	.910	0.06	3.01	1.02	2.76	1.06	3.62**
12. 移り気	3	1.033	2.907	1.211	0.70	3.55	1.08	3.46	1.03	1.42

\*  $P < .05$       \*\*  $P < .01$ 

注：日本のデータは井上知子他「新性役割尺度の構成に関する研究」追手門学院大学文学部紀要28号(1993)の中から、対応できる項目のみ抜粋したものである。

し、女性の少ない学部が多いので、その中で男性と伍して活躍してきた女性に、これらの項目の値が高いのも頷けることであろう。

日本の女子学生たちも「意欲的」「活動的」の項目はスウェーデンの女子学生と同じく男子を上回っている。日本の大学生の場合、9項目の中で従来の男性役割と考えられる「声大きい」「意欲的」「活動的」の項目で女子の方が若干上回り、反対に伝統的な女性役割と考えられる「子ども好き」「家庭的」「感情的」の項目で男子より下回るか同率を示している点で、伝統的な性役割からの脱却の傾向が窺える。スウェーデンの女性については、伝統的な性役割を選択している方が項目数としては多い。

スウェーデンで男女とも値が高いのは「議論好き」の項目である。日本の方のデータがないので比較できないが、従来から言われているスウェーデン人の議論好きの国民性が現れていると言えよう。

限られた項目による調査のため、断定的なことが述べられないが、わずかな項目にも関わらず意外にスウェーデンにおける伝統的な性役割習得の状況が窺えることは何に起因するのか、さらに深い検討が必要とされよう。

#### B. 基礎学校の頃なりたいたいと思った職業について

男子は技術者、科学者、パイロット、医者が上位を占め、全体の45%になっている。それらはみな理科系でしかも社会的にも地位の高い職業群である。



表6 子どもの頃なりたかったもの(複数回答)

男 子		女 子	
技術者	8	医者, 歯医者, 獣医	8
パイロット, 宇宙飛行士	6	アーティスト, ミュージシャン	5
科学者, 物理学者, 天文学者	6	法律家	4
医 者	5	科学者	3
警 官	3	パイロット, 宇宙飛行士	2
ミュージシャン	3	色々なもの, いくつか	2
教 師	2	作 家	2
コンピュータ・プログラマー	1	その他(ジャーナリスト, 教師, 技術者,	
作 家	1	建築家, 女優, 電気工, 農民 etc 各 1)	9
その他(ビジネスマン, 野球選手, 鉄道員, 国際		考えなかった	4
企業家, ジャーナリスト, 弁護士 etc 各 1)	9	分からない	4
覚えていない, 分からない	5	N. A	3
考えがなかった	1		
N. A	3		
計	53	計	46

女子で一番多いのは医学関係であるが, 全体的にみて理科系が多いとは言えず, アーティストや法学なども結構多い。女子の方が文系の志向性は男子よりも強いが, しかしそれでも約1/3でしかない(表6)。既述した図1で見られるようにエンジニアや建築, 機械関係など理系の職種には男性が多いのだが, 今回の対象者の女性たちは理系専攻者が多かったために, 幼い時から一定程度理系の職種への志向性が窺えた。それは結果的に社会的, 経済的に地位の高い職種への志向性があるということになる。

そもそもここでの設問は, 幼い頃に描く将来の夢に性差があるかどうかを意図したのだが, 今回の対象者たちはエリート層であったためか, あまり性差は見られなかった。その点においては, 様々な階層の大学生, あるいは労働青年についても調査する必要があるだろう。

表7 男女平等教育の自分への定着度

	男	女	計
十分である	27(51.9)	24(54.6)	51
時々不徹底を感じる	23(44.2)	17(38.6)	40
しばしば不十分を感じる	1(1.9)	1(2.3)	2
N. A	1(1.9)	1(2.3)	3
計	52(100)	44(100)	96

### C. 男女平等教育の自分への定着度について

僅差ながら, 全体として女子の方が定着しているという意識は高く, しかも両性とも十分であるとする層が過半数に達している。認知の割合は高いが, たとえば後述の専攻分野の偏りの原因分析に見られるように, 認知の内容が問われることになろう。

### (3) 男女平等のライフスタイルの意識について

結婚生活の中で, 育休をとるかどうにかおよび家事

表8 将来, 育児休暇をとる意志

	男	女	計
と る	43(82.7)	43(97.7)	86
とらない	7(13.5)	0	7
N. A	2(3.8)	1(2.3)	3
計	52	44	96

育児への関与の度合いについて、子どものいる人とまだいない人に分けて聞いたのだが、全員子どもがいなかったため、集計は一通りになってしまった。

A. 将来、子どもを持ったら育休をとるかと思うと、男子の82.7%、女子の97.7%がとると答えた。男子の意識も相

当に高いのは、1994年から父親の最低1ヶ月の育休が指定された<sup>12)</sup>という背景もあると思われる。

さらに育休の期間について尋ねると、表9のようであった。

男子は半数近くが1年未満を挙げ、短い方に傾いている。女子は半数近くが12ヶ月を挙げているが、全体としてバラツキは男子よりも大きい。女子がとりたてて長い方に傾いていないのは、やはり専門的に高度な職に就く可能性が高いからであろうか。

表9 育児休暇をとる期間

男 子		女 子	
1ヶ月	1人	2ヶ月	1人
2 "	3 "	3 "	1 "
3 "	5 "	4 "	2 "
4 "	1 "	数 "	1 "
6 "	4 "	6 "	1 "
9 "	2 "	9 "	1 "
12 "	6 "	10 "	2 "
15 "	1 "	12 "	16 "
18 "	2 "	18 "	2 "
24 "	3 "	24 "	1 "
36 "	2 "	36 "	1 "
できるだけ・最大	3 "	75 "	1 "
パートナーによる	1 "	最大	2 "
計	34人	パートナーによる	1 "
		仕事による	1 "
		夫と分ける	1 "
		not sure	1 "
		計	36人

B. 将来、家事、育児にどの程度関与するつもりかの問いに対しては、表10のようになった。大きな差ではないが、やはり女子の方が多く関与するつもりでいることが分る。とは言え、男子学生の関与意識も相当に高く、男女平等教育の成果はこのような点では大いに表われていると言えよう。

表10 家事・育児への参加の意志

	男	女	計
仕事や余暇に差し支えない程度	7(13.5)	2(4.5)	9
パートナーと半々に	41(78.8)	36(81.8)	57
半々よりも多く	4(7.7)	6(13.6)	10
計	52(100)	44(100)	96

しかしまた一方で、エリートではない男子青年たちのこの面での意識はどうか、探ってみる必要があろう。

ちなみに、現実にこの国の男女が家事労働に費やしている時間は週当たりつぎのような状況である。(20~64才の統計、SCB 1993年)

〔女性：17.22時間<sup>12)</sup>  
男性：6.36 〕

これから分るように、この国においても一般的には、3倍近く女性が無償労働に携わっている割合が高いのである。

今回の男子大学生たちの関与意識の高さが単なる意識だけのものなのか、現実にも実行されるものなのか、さらなる調査が必要とされる。  
(大村恵子)

#### (4) ジェンダーと専攻分野に関する意識

すでにみた自己形成とジェンダー、男女平等のライフスタイルは、「男女平等教育」がスウェーデンの青年学生たちに「男女平等」意識を形成しているのがわかってきたが、実態としては、「男子の専攻コース」と「女子の専攻コース」(図2)は分離している。この分離は当然の事ながら卒業後の職業に連動する。

最近のスウェーデンの新聞<sup>13)</sup>は「スウェーデンにおいては女性への賃金差別はない」と一面のトップの見出しをつけている。これは男性が多い職業における女性の賃金は男性と同じであり、逆に女性の多い職業における男性の賃金は女性と同じように低いという意味で報じられている。すなわち、同じ職種においては男女の賃金差別はないということである。

男女の専攻コースの分離を解消すべく、さまざまな実験がすでに、70年代から行われている。例えば、男性性、女性性は子ども時代の周囲の環境と社会化によって発達させられるから、社会化のプロセスを変えることによって変化出来ると考えられ、「Sex role equality program」がSDPによってなされている。しかし、このSex Role Approachの考え方に、80年代から批判が出されている。これらの批判は、ジェンダー(社会的に作られた性差)によるものか、それとも個々人の興味、あるいは生物学的な男性、女性によるものかという議論が再び湧きあがっているのである<sup>14)</sup>。

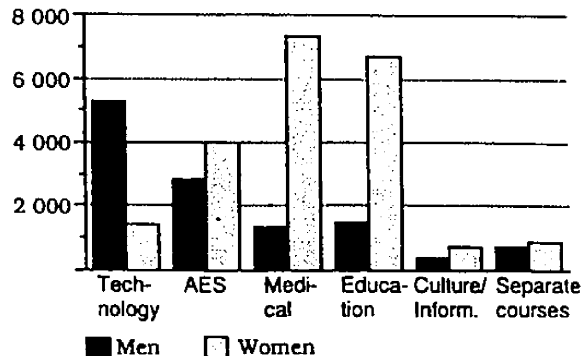
以上のような状況を学生達はいかに認識しているのかを問うべく、「スウェーデンでは学部や学科の構成で男女のアンバランスが見られるが、それをどのように考えるか」というのが設問である。

フリー・アンサーであったが、それをまとめたのが表11であるが、みられるように多様である。

まず、「アンバランスがあるとは思わない(現状認識をしていない)」22%、「アンバランスの現状を認め、それをよくないことであり、何らかの方法で解消すべきだと考える」44%である。その理由、あるいは解消する方法として、「情報の欠如」「女性はもっと自然科学にかかわるべきである」「学校、社会がもっと検討すべきである」「大学などの教育機関に女性の教官をふやすべきである」「男女の社会化に問題がある」「社会変革が必要である」をあげている。

図2 男女の専攻分布(大学)

Distribution of degrees by sector for men and women in the fiscal year 1992/93



資料出所 Education in Sweden 1994 (ISSN 1103-4381)

※ aes --- admincstrate, economical and Social

表11 学部、学科の男女差についての意識

	男	女	計
① アンバランスがあるとは思わない	8	13	21
② アンバランスがあるがそれは男女の自然な姿である、個人的な選択である	7	12	19
③ アンバランスがあるが	17	3	20
④ それはよくないことである		1	1
⑤ それは情報の欠如による	1	4	5
⑥ 女性もっと自然科学にかかわるべき	3		3
⑦ 学校、社会がこの問題について検討不足である	2	3	5
⑧ 大学など教育機関に女性の教官をふやすべきである		2	2
⑨ 男女の育てられ方による		1	1
⑩ 学部の選択による	4	1	5
⑪ 社会の変革が必要である			
④ 男女が50%づつになっても、それが平等とはいえない	2	1	3
⑤ N.A	8	3	11

性別でみると、女子学生においては「アンバランスがあるとは思わない」30%、「アンバランスがあるが、それは男女の自然の姿、あるいは個人的な選択の結果である」27%、と6割近くが現状のアンバランスを肯定しているのである。

逆に男子学生の52%が「アンバランスである現状を否定」している。

これは一体、どう解釈したらよいのであろうか。この調査対象者の女子学生は、属性でみたように、ほとんど理工系の学生であった。従って、自らの個人的選択で理工系を専攻した故に、この結果が出たのであろうか。

スウェーデンの教育理念には「個の尊重」と「平等教育」があげられているが、この二つの理念が並列であり、教育の機会均等が、現状の社会の中では機械的平等であり、実質的平等（子どもの時からの社会化の要因などを十分に考慮しないため）になっていない現状を反映したものといえるかもしれない。

わずかではあるが、「男女が50%づつの専攻となっても、それが平等とはいえない」という意見にみられるように、真に個人的興味による選択であり、それが社会的差別を生むものでないならば、女子学生の肯定も理解できる。しかし、先述したように、女性の多く就く職業の賃金は低く、真の平等が達成できているとはいえないのである。だとすると、ここにあげた女子学生の6割は、エリートとしての意識形成をしているといえるのではなかろうか。

男子学生の52%、女子学生の34%が現状のアンバランスを認め、何らかの解消の道を提起している。それは社会変革（男子学生）であったり、「ある課程を選択するには、男性、女性であるよりも、興味の違いであり、これらの違いは男の子、女の子の育てられ方にあると思う」（女子学生）など、ジェンダーによることをみぬいている学生もいる。従って、ここでの意識は、現状肯定、否定と錯綜しているといえよう。

#### (5) ワンペアレント・ファミリーに関する意識

すでに述べたようにスウェーデンでは法的結婚が減少し、サンボ（事実婚）、同棲が主

流であり、離婚、サンボの解消も多い。すでに1970年に庶子に嫡出子と同等の相続権を認め、1977年には庶子という概念を法律から削除した。従って、社会的にも、両親と子、ワンペアレントと子に対する差別はないといわれている。そのような社会文化的背景の中で生育した学生たちは、それをどのようにうけとめているのかを探るのが目的であった。

#### A. 調査対象者の親のシビルステイタス

まず、調査対象者の親たちの婚姻関係をみたのが表12である。現在、結婚中（事実婚も含む）の親が男子で73%、女子で88.6%であり、離婚した親をもつ学生は、男子で21.2%、女子で9.1%である。いわ

表12 調査対象者の親のシビル・ステイタス

調査対象者の親	男	女	計
婚姻(事実婚も含む)	38(73.1)	39(88.6)	77(80.2)
離婚	11(21.2)	4(9.1)	15(15.6)
死別	1(1.9)	1(2.3)	2(2.1)
N.A	2(3.8)	0	2(2.1)

れるほどに離婚が多くない。この対象者

たちの親の離婚の少なさは、「良い教育環境（経済状況の良さ、両親の教育の良さ、良い教育や職業への情報量など）は、前期中等教育までのレベルで子供が高い成績とるのに役立ち、更により長い教育期間や、よりよい職業に対する進路計画をもつうえで役に立つ」<sup>15)</sup>という指摘に符合し、すでにみたように、この対象者たちが、選抜をくぐりぬけてきた事実、それを可能にした良い教育環境であったことを示すのかもしれない。

#### B. ワンペアレントで生育した学生の意識

ワンペアレントで生育した学生のうち、親との別れが「4才～6才の時」が8名で、次に「7才～12才」が4名、「13才～19才」が3名、「0才～3才」が2名と分散している。が性別でみると、男子の8割が6才以下で親が離婚し、女子の8割以上が7才以上で離婚に遭遇している（表13-①）。

親の離婚、死亡を理解できたか否かの質問では、「十分に理解できた」は7事例、「十分に理解できなかった」「まったく理解できなかった」が7事例と相半ばする。よく理解できたのは女子に多い。年齢でみると女子は7才以上の時に親の離婚に遭遇している。しかし、年齢と理解度に関係があるとは必ずしもいえない。男子の場合には7才以上でも「十分に理解できなかった」事例がみられるのである。親の離婚を子どもに理解させ、納得させるには、男女差があるかもしれないが、ここではサンプル数が少なく、これ以上言及は出来ない（表13-②）。

同居していない親との交流は、少なくとも週に1回、あるいは毎日が80%を占める（表13-③）。表2においてみたように、1977年に「未婚、離婚両親に共同養育権」が設定されている。離婚による不利を子どもに影響をおよぼさないように配慮する点と、別れたとはいえ、両親に子どもを養育する権利を与える（男女平等）という二つの側面から考えられていることが、ここで明らかにみられるのである。日本において、離婚による別れた親との交流が従来ほとんどない状況からみると大きな文化的差異を感じる。

親の離婚は情緒的に苦痛を与えたか否かをみると（表13-③）、「非常に苦痛であった」と「苦痛ではなかった」が相半ばする。しかし、これには男女差がみられ、女子では「より苦痛に感じ」、男子では「苦痛ではなかった」とする学生が多い。すでにみた、何才の

表13 ワンペアレントで生育した学生への質問

			男	女	計
①	何才の時に離・死別したのか	0 ～ 3 才	2	0	2
		4 ～ 6 才	7	1	8
		7 ～ 9 才	3	1	4
		9 才 以 上	0	3	3
②	親の離婚を理解できたか	よく理解できた	4	3	7 (男子のN.Aを除く)
		十分に理解出来なかった	4	1	5
		まったく理解できなかった	2	0	2
	一緒に住んでない親との会う頻度	毎日会っていた	1	3	4
		毎週会っていた	7	1	8
		毎月会っていた	1	0	1
		数ヶ月に1度会う	1	0	1
		1年に1度会う	1	0	1
③	ワンペアレントが苦痛であるか否か	非常に苦痛であった	2	1	3
		苦痛であった	2	3	5
		苦痛ではなかった	7	1	8
④	性格に影響したか	影 響 あ り	6	2	8
		影 響 な し	6	3	9

時に親の離婚に遭遇したかと関係する。年齢が低い段階で親の離婚に遭遇した男子の場合には情緒的に苦痛を感じるのが少ない。先述したように、親の離婚を理解する女子が多かったが、女子は苦痛を感じながらの理解であったといえよう。女子の事例の中に「非常に苦痛であった」とし、「しかし、お互い愛情のない同居は、より一層、状況をわるくしただろう」と余白に記入してあったことから、うかがえる。

ワン・ペアレント・ファミリーで生育したことが、性格などに影響したかどうかの質問に対しては、さまざまである。男子の場合、「閉鎖的になった」「自律心が養われた」「自由になった」「自分ではわからないが影響を受けたように思う」、女子の場合は「今、母が幸せなので(新しいサンボを得て)自分も幸せ」「自立心が出来た」と自分の性格への評価をしている(表13-④)。

#### C. ワンペアレント・ファミリーで生育することに関する意識—調査対象者全員

この問いは、フリー・アンサーであったが、おおまかな意識は表14のように分布している。ワンペアレント・ファミリーで生育しても、両親揃った環境でも同じであるとする学生は約18%で、男女差はない。条件さえ整えば、変らないとする学生は14%、これも男女差はない。ワンペアレント・ファミリーで育つことに対する何らかのマイナス評価をする学生は約48%である。これは女子の55%が支持している。とりわけ「両親の保護が必要である」「役割モデルが欠如」をあげる女子が半数以上を占める。性格的に不安定で暴力的であるとする学生も多いし、特にワンペアレント・ファミリーの場合、経済的に不利で、可能性をつみとられるとする女子学生もいる。男子に多いのは「かわいそうである」という情緒的なレベルのものが多い。

表14 ワンペアレント・ファミリーで生育することに対する意識

		男	女	計
1. プラス評価(自立心などあり,よい)		2	0	2
2. 特別ではない。両親揃った子と変りはない		9	8	17
3. 条件付で差はない	1. 子どもの年齢による 2. 一方の親に愛があればよい 3. 一方の親の人間性による 4. ケースによる 5. 争っている両親よりも,ワンペアレントの場合がよい 6. 一方の親の性との接触があればよい	1 1 1 1 2 2	1 1 1 0 3 0	13
4. マイナス評価	1. アイデンティティの欠如, 少年には父親が必要 2. 情緒的に弱点をもつ, 不安的である。暴力的で粗野になる 3. 両親の保護が必要である。両親への依存ができない。役割モデルがない 4. 多くの問題をもっている 5. 気の毒である。悲しいことである 6. 経済的に不利である。可能性をつみとられる 7. 子ども時代に何かを失う 8. 環境がよくない	2 5 5 1 6 0 2 1	2 4 13 2 0 2 0 1	46
5. こんな質問は,ナンセンスである		2	1	3
6. N.A		10	5	15
		52	44	96

N.Aが16%もあるが,このうち半分(5事例)はワンペアレント・ファミリーで生育した学生である。ワンペアレント・ファミリーで生育した他の学生は,「自立心が出来てよい」と積極的に評価する1事例,「特別ではない」とする5事例,「条件付」4事例と概して認めている。

#### D. 家族は重要か

家族(サンボも含む)は重要であるか否かでは,全体の72%が非常に重要であるとし,特に,女子の75%は重要であると答えている。先のワンペアレント・ファミリーでの子どもの社会化の評価と連動している。家族の内容を設問していないので,これ以上の分析は出来ないが,この点については我々の更なる課題である。

表15 家族は必要か

	男	女
重要である	36	33
いくらか必要である	12	9
まったく必要でない	2	1
N.A		1

## お わ り に

今回の調査研究はスウェーデンの男女平等教育の成果をみるための予備的調査であったために、種々の問題点、課題を残したが、少なくとも明らかに出来ことをまとめておく。

第1章でみたように、1960年代より、絶えまなく改革され、実験的試みがなされてきた男女平等政策は、一定の成果をあげているように思われる。しかし、70年代の「性役割」を打破する積極的な試みに対して、どのような総括がなされて、現在のように「ジェンダー」というより生得的性差にもウエイトをかけるようになってきたのかを明確にすることが出来なかったは、今後の課題である。

第2章の大学生の調査においては、少なくともライフスタイルのベースとなる価値意識形成のレベルでは男女平等政策の成果があらわれていたといえよう。しかし、この調査対象者たちの偏りから、これをスウェーデン社会の青年の一般的な価値意識だとすることは早計であろう。この点についても更なる検討が必要である。

論点とははずれるが、スウェーデンを訪れる度に感じることは、その街の美しさであり、リサーチに訪れたいずれの機関、学校、保育所のあたたかい雰囲気——人、部屋のつくりである。日本の官庁、学校、保育園でのリサーチとの大きな違いがみられる。国全体、都市全体がそこにすむ人々に配慮された環境をつくっているように感じられる。

この小論を書くにあたって、さまざまなスウェーデンの人々にお世話になったことを感謝したい。とりわけ、三根子、V・オイラー氏にはスウェーデン語がわからない我々に通訳としてお世話になったことを感謝します。

## 註 記

- 1) スウェーデン人、レオン・パウチャーによる『スウェーデンの教育』が翻訳されたのは1985年（学文社）であり、以下すべて1990年代に出版されている。
- |                    |               |             |       |
|--------------------|---------------|-------------|-------|
| 『おんなたちのスウェーデン』岡沢憲美 | NHK ブックス      | 1994年       |       |
| 『スウェーデンを検証する』      | 岡沢憲美          | 早稲田大学出版部    | 1993年 |
| 『スウェーデンの挑戦』        | 岡沢憲美          | 岩波新書        | 1991年 |
| 『スウェーデン人はいま幸せか』    | 訓覇法子          | 日本放送出版協会    | 1991年 |
| 『スウェーデンの生活者社会』     | 藤岡純一編         | 青木書店        | 1993年 |
| 『スウェーデン・女性解放の光と陰』  | リジェストロウム他     | 勁草書房        | 1987年 |
| 『女たちのスウェーデン』       | 塚口レグランド淑子     | 勁草書房        | 1989年 |
| 『スベリエ手帖』           | 小川信子          | ドメス出版       | 1991年 |
| 『男女共生社会のワークセエアリング』 | 鎌田とし子         | サイエンス社      | 1995年 |
| 『未来都市に住む』          | ビヤネール・多美子     | 全国勤労者福祉振興協会 | 1995年 |
| 『スウェーデンハンドブック』     | スウェーデン社会研究所編  |             |       |
|                    |               | 早稲田大学出版部    | 1992年 |
| 『高齢社会と地方分権』        | 斉藤弥生・山井和則     | ミネルヴァ書房     | 1994年 |
| 『スウェーデンの経済と福祉』     | 丸尾直美          | 中央経済社       | 1992年 |
| 『スウェーデンのグループホーム物語』 | バルブロー・ベック・フリス |             |       |
|                    |               | ふたば書房       | 1992年 |



- 『クリッパンの老人たち』 外山義 ドメス出版 1990年  
『寝たきり老人のいる国いない国』 大熊由紀子 ぶどう社 1990年
- 2) 松崎巖「男女平等と教育—スウェーデンのケースからの検討」『教育学研究』第49巻第3号 1982年9月 pp. 73-83
- 3) 笹谷春美『北欧都市における男女平等教育とライフスタイル』1995年度国際ブラザ研究助成報告 1996年4月  
われわれ(松浦, 大村)と笹谷春美(北海道教育大学教授)は、同時に同じ調査を行い、笹谷氏は上記の報告書を作成しているが、内容において共通部分と異なる部分もある。
- 4) 「基礎学校教育課程規準」94年版を三根子・V・オイラー(ストックホルム教育大学講師)に翻訳を依頼した。
- 5) 松崎巖, 前掲書
- 6) 「基礎学校教育課程規準」82年版を三根子・V・オイラーに翻訳を依頼した。
- 7) Equality between Men and Women in Sweden, Fact Sheets on Sweden, 1992. 2
- 8) 1975年7月1日, 毎日新聞
- 9) 善積京子「スウェーデンの家族はどこへ行く」『現代家族のルネサンス』布施晶子, 玉水俊哲, 庄司洋子編 1992年, 青木書店
- 10) 岡沢憲美, 前掲書
- 11) ビヤネール・多美子, 前掲書
- 12) 岡沢憲美『おんなたちのスウェーデン』, 前掲書
- 13) 1996年10月28日 Dagens Nyheter
- 14) Hilda Scott『Sweden's efforts to achieve sex role equality in education, in S. Acken et al eds, World Yearbook of Education, 1984, pp.257-267
- 15) 滝元「スウェーデンにおける選抜・過分過程(その1)ー高校進学にはたす基礎学校の機能ー」日本教育社会学会報告 (松浦勲)

## 資 料

We are Ms Keiko Ohmura, an educational psychologist and Ms Isao Matsuura, an educational sociologist in Japan. We would like to conduct a questionnal survey of university students under 25 years old about gender role and one-parent families with the cooperation of Ms Von Euler Mineko.

Please take a moment of your time to complete this brief questionnaire.

### I. Please describe yourself:

1. Age ( ) 2. Sex: 1) male 2) female 3. Faculty ( ) 4. Program ( )  
5. Civil Status 1) Single 2) Married 3) Sambo 4) Other ( )  
6. Living 1) With your parent 2) On your own 3) Other ( )

### II. Self evaluation (from 1 to 5 with 5 the greatest degree, 3 the average, and 1 the least)

Please circle the number which describes you best.

- |   |    |    |    |    |    |
|---|----|----|----|----|----|
| 1) I like children.                     | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 2) I like discussion.                   | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 3) I like knitting or other handcrafts. | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 4) I like to be independent.            | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 5) I am emotional.                      | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 6) I speak in a loud voice.             | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 7) I am ambitious.                      | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 8) I am active.                         | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 9) I am a dreamer.                      | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |

- |                               |    |    |    |    |    |
|-------------------------------|----|----|----|----|----|
| 10) I like mechanics.         | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 11) I like domestic pursuits. | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 12) I am capricious.          | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |

III. Please describe your thoughts about the following questions.

1. What did you want to be when you are a compulsory school student?
2. In Swedish universities, there are sexual imbalance in composition of faculty or programs. What do you think about this?
3. You have received education for sexual equality for a long time. How firmly do you feel that the awareness of sexual equality has been internalized in your consciousness?  
I am
  - 1) constantly aware of sexual equality.
  - 2) sometimes insufficient aware of sexual equality.
  - 3) often insufficient aware of sexual equality
4. This question is asked to those who have no children.
  - A. If you should have a child / children in the future, would you take childcare leave?  
 1) Yes. (            ) months  
 2) No.
  - B. If you should have a child / children in the future, to what degree would you participate in house work and childcare?  
 I would:
    - 1) participate to the extent that it doesn't interfere with my work or leisure activities.
    - 2) share with my partner equally.
    - 3) do more than my fair share.
5. This question is asked to those who have children.
  - A. Did you take childcare leave when your children were born ?  
 1) Yes. (            ) month  
 2) No.
  - B. To what degree do you usually participate in housework and childcare?  
 1) I participate to the extent that it doesn't interfere with my work or leisure activities.  
 2) I share with my partner equally.  
 3) I do more than my fair share.

IV. Please describe your thoughts about one-parent families.

1. Your parents are now :  
 1) married 2) divorced 3) deceased 4) other (            )
2. If you have circled 2 or 3 in the above question, when did your parents divorce or when did one of your parents die?  
 1) when you were 0~3 year old  
 2) when you were 4~6 year old  
 3) when you were 7~12 year old  
 4) when you were 13~19 year old  
 5) when you were 20 year old or over

3. These following questions are asked to those whose parents are divorced.

A. Did you understand your parents' divorce?

- 1) sufficiently
- 2) not sufficiently
- 3) not at all
- 4) other (            )

B. How often have you been meeting your divorced parent with whom you do not live?

- 1) every day 2) every week 3) once a month 4) once every few months 5) once a year
- 6) other

4. These following question are asked to those who answered 2 or 3 to the question no. 1?

A. How much emotional distress did your parent's divorce or your parent's death cause you?

- 1) very much 2) much 3) not much

B. Has living with one parent had an effect on your personality?

- 1) Yes.

Please explain.

- 2) No.

5. These following questions are addressed to all respondents.

A. What do you think about the children who are raised by only one parent?

B. How important do you think having an intact family (include Sambo) is?

- 1) very 2) somewhat 3) not at all